

# 『法の窮極に在るもの』(新版再版)

尾高 朝雄 有斐閣

本館	請求記号：K/321/O17	資料ID：100904796 105301915
神田分館	請求記号： /321/O17 [Knowledge Base展示中]	資料ID：104619747 103432993

## 法学部教授 高橋 寿一

入学、おめでとうございます。

皆さんは、法学部をなぜ選んだのでしょうか？ひょっとしたら「他に受かったところがなかったから」かもしれません。そうだとすると、これから法学を勉強して将来の自分にとって血となり肉となる何かを掴んで下さい。

あるいは「法律に興味があったから」が多数の回答かもしれません。私も数十年前に法学部を選んだ際の動機は正にそうでした。それでは、法のどういう点に興味を持ったのでしょうか？最近の潮流は、ロースクール教育に典型的なように「実用法学」が主流です。実用法学とは簡単に言えば、「現実の紛争を法的な道具立てを使って解決するための学問」とでも言うておきましょう。六法に代表される既存の法律を現実の紛争に当てはめて、解決の指針を得ようとするものです。法学部を選ぶ多くの学生は、多分この側面に興味をもって法学部を選択したのだと思います。

私は、元々上記のような法学にはあまり興味がありませんでした。むしろ、「あの法律はどのような理念を背景として作られたのか」とか「今日の姿になるまでにはどのような法思想がぶつかり合いながら今に至ったのか」など、既存の法の背後やその外側にある理念や法思想ないしは歴史を知りたくて法学部を選びました。

そのような私にとって、本書は私の問題意識を満たすのに恰好な書となりました。「法の究極」には何があるかって、知りたいと思いませんか？ 結論は私が期待していたものとは異なりましたが、そこに至るまでの論旨の進め方がとても新鮮で、「法学部に入った」という実感を十分に味わうことのできる書でした。